

羽文雄文学全集 第二十三卷
薇合戦

丹羽文雄文学全集 第二十三卷

薔薇合戦

一九七五年二月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二・郵便番号 一一二一
電話 東京(〇三三)九四五一一二一(大代表)・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えます
©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan (文1)



目次

1

薔薇合戦 7

創作ノート 323

装幀・辻村益朗
(写真・一九五八年)

丹羽文雄文学全集 第二十三卷

薔薇合戦

薔
薇
合
戦

三人姉妹

1

事務用の黒い折袍をかかえて、千鈴は銀杏の下を歩いてゐた。虎の門から新橋に向うこの並木路は東京中で一番情緒のゆたかな舗道である。秋になると、細かい黄色の枯葉が散って、舗道をかざってくれる。聲音につづいて三、四枚の枯葉が静かに舞って動くのだが、人間の聲音にふさわしい落葉の大きさであった。しかし今は青葉若葉の五月だからと仰向くと、緻密な葉の茂みの中に、街燈が水に濡れたように青く光っていた。

新橋近くの鮎屋横丁に来ると、千鈴はふと鮎が食べたくなった。鮎屋の暖簾を見てから思いついたのだから、ほどうい腹のへり方をしていたのである。鮎屋の格子戸を開けるのでなく、立食の方の暖簾をくぐろうとして、かぶっていると言うよりは軽く乗せている紺色の帽子をまっすぐ据えるように身をかがめると、

「お嬢さんの立食いは困りますよ」

大きな手が千鈴の肩を掴んだ。よろめいたが直ぐ立ち直った。暖簾の中から突然に手が伸びて捉えられたように感じたけれど、千鈴は暖簾の外に立っていた。肩の手を外すように肩をひねったが、ひねり足らず、

「今晚は」

と言う、見上げるような高さから挨拶を受けた。

「いやだ、化物かと思つたわ」

肩の手が外れないのも道理で、六尺に近い相手の腕は千鈴の頭のところで余裕をつけて曲っていた。千鈴は咄嗟に、この男が何という名前であつたか思い出せなかつた。

「鮎ならもつとうまいところを案内しよう」

「あたし、別にご馳走になりたくないのよ」

「まあ、そう言わずについていらつしやい」

再び電車通りに出ると相手は猫背になつて歩いた。あまり背が高すぎるので、この男は年中間に気がねしているのであらうと、形のいい帽子の下からすばやく見上げる千鈴の目は、いまだにこの男が誰であつたか思い出せないでいた。しかし相手の自分をよく知っているらしい気持を受けて、千鈴もそんな躊躇は顔に現さなかつたけれど、折袍をいつそ胸もとへ持ち上げるように抱えた。

自動車拾つた。

「遠いところ？」

「神楽坂ですよ」

車の中で、千鈴はこの男と逢っているのは二、三回目だ
と思い出した。初めて逢ったのは確に百合化粧店であり、
姉の真砂の紹介であつた。が、名前さえ器用に覚えていな
いような相手に車にのせられてほんやりと食物につられて
いくことが馬鹿げて、不安でもあつた。それとなく相手の
リーファアの襟を見ると、安心が出来た。百合化粧店員の
マークが目立たない赤銅色の七宝をちらりと光らせた。真
砂と同じ会社の人であることが、千鈴の娘らしい不安をな
くしてくれた。

坂下で車を捨て、賑やかな坂を上った。横丁を折れて、
浅黄色の暖簾をくぐると、鮎屋でなく、てんぶら屋であつ
た。客はいなかった。

目の前で掲げる店である。硝子器にはいった油がとろり
として、いい色艶で沈んでいた。

「鮎の立食いが出来るなら、お酒ぐらい飲むでしょう」

「平気よ」

子供の意地っ張りの気持で、千鈴は盃を取上げた。のみ
馴れない液体が喉をすべると、子供っぽい顔立になり、あ
どけなく目を大きくした。相手は笑つて、再び注いだ。

「酔つぱらったら、お宅まで送りますよ」

三、四杯の盃で、千鈴の胸は高い動悸を打ち始めた。い
く度も椅子の位置を直してみたが、そんな動作や表情から
際立つて美しいものが溢れた。これを黙つて眺めている相

手は自分も手酌で飲みながら、ひそかに千鈴の胸騒ぎに誘
われて、妙に心の躍ぎ立つ顔付になつた。

2

腹のくちくなくなったからだで、千鈴は相手のうしろから何
気なくついていった。ついていったなら自ずと電車通りに
出るものと思つていたが、路地のような狭い路をいくつか
曲つた。二人が並んで歩くには狭すぎる。洒落た軒燈と門
構えの家がゆく先々の路地をかざつていて、日本髪の方が
すれ違つた。あとから箱屋が何かかついて急いで抜けた。

どんな抜け道を案内するつもりなのか、相手は一度もふ
り返らず長身を運ぶのである。千鈴も言葉をかけるのが癪
で、どこまでもついていってやれと頑張り、サンダル靴
音を立てた。ある一軒の茶の間のような部屋が、路地に向
つて障子を開け放していた。男は目もくれずに通り抜けた
が、千鈴はそんなところに肌脱ぎの四、五人の女を見よう
とは予期しなかつたので、思わず足をとめた。女たちは胸
もとから背中の方まで白粉を塗りつけて、梳きあげたばか
りの髷をつやつやとあかりに反射させていた。肌脱ぎにな
っているの、みんな瘦せて見えた。大きな日本髪の子
だらう。見てみると、女たちも千鈴を珍しい動物か何かの
ように振り返り眺めるのである。多勢に無勢で、千鈴は負
けて歩き出したが、あたりの凝つた建物や木立の茂つた門

内の踏石が渋い色をつけているなど、袖の長いのを重たげに運んでいく小さい女の隙間のない化粧着付が、如何にもびったりと似合うこの特別な路地では、黒い袍をかかえた千鈴のバスクスタイルが場所違いで、見る目に激しかった。

「おや、間違えたか知ら」

男の長い姿が一步門内にはいると、立ちどまった。そこは路地の行きづまりになっていて、足許の庭石に、桃山時代の鉄の大燈籠が灯を入れてうずくまっていた。くま笹が恰好よく茂っている。入口の波の花はまだ足も踏みつけていない。

「行き詰まりじゃないの」

「可怪しいな。たしかここだと思っていたんだが」

相手は少しあわてて門を出ると、手近の軒燈を一つ二つ見て歩いた。

「ここだ」

富士の江と書いた軒燈をくぐって、男は誰も出迎えに出て来ない内に靴を脱ぎ始めた。千鈴はびっくりして、表から眺めていた。年増の女中が出て来ると、男はもう階段を上りかけた。その一人極めなやり方が、あまりに傍若無人であった。忌々しいので、千鈴は意地の悪い目の色になった。

「どうぞ」

女中がよく光る玄関で膝をついて迎えた。抵抗しようかな、と一瞬思った。が、まだ何事も反抗するだけのことも起っていないではないかと自分に答えて、千鈴は爽かに上り櫃に上る拍子にサンダルの方を倒した。まだ酒の氣がからだから抜けていないのだと判ると、すべてを酒のせいにして、通りすがりの部屋々々が珍しく、のぞきこむように歩いた。静まりかえっているの、こうした世界ではまだ時間が早いのが知れた。どの部屋も茶室めいた作りで、火燈口のような入口がついている。

「千鈴さんはこんな家を知ってるんでしょう」

「そう見えて？」と脚を紫檀の下へ投げ出した。

「あんまり落着いている」

「どこかの温泉旅館へでも来たような、珍しい気持よ」それが実感であった。

女中が黒塗の提げ棚盆を運んで来たが、茶道具であった。申訳のように二人の方へ茶托を分けにかかる手許へ、

「すぐお銚子をたのむ」と男は言って、追いやった。

「今夜は是非あんたに真面目に話したいことがあるんですよ」

「まさか、酔わせて聞きたい手じゃないの」

「真面目な話、僕はあんたの義兄さんの一味徒党ですよ。百合化粧会社にとっては陰謀組の一人なんですよ」

「おお、恐い！　まるで連判状でもありそうな意気込みね」

「勿論あんたの義兄さん、里見剛三氏の息のかかっている社員は、血判の一つ位はとうに捺していますよ」

「それじゃ真砂姉さんも一味徒党ね」

「勿論です」

「雛子姉さんは？」

千鈴は坐り直した。用意のない感覚が惑うのである。次第に相手に向って自分が氣を取られていく激しさにはまるで氣がつかなかった。

「雛子さんは仕事が仕事だから、大切な話はまだもらしてはないのです。準備が十分に出来ない内に会社に知れてしまつては、虻蜂とらずですからね。第一この陰謀の真相を知っている人間だつて、そう沢山はいないのですよ。しかもし血判状みたいなものがあるとすれば、この日夏泰助は五、六番目に名前をづらねているんでしょ」

千鈴は今更のように別な氣持で男の顔を見た。そんな頭の中を、そうだ、日夏というのだったとのんびりした記憶が落ちるように掠めた。

「その話、たしかに信じてもいいのね」

「誰がこんなところへ来て嘘をつくもんですか。雛子さん

にさえ知らせてない秘密ですよ」

二番目の姉の雛子はここ二、三年百合化粧会社でタイピストを勤めているのだが、タイピストという仕事の軽さが義兄や姉の秘密に立ち入ることを許さないというのである。陰謀の内容は勿論判らなかつたけれど、ことの重味だけは千鈴にも判るのだ。妙に不安であつた。こんな重味の前では千鈴は子供供してしまふのである。二十歳という胸の深みでは、義兄などの秘密を受け入れるには浅すぎで、弱いのだ。肉体的な苦痛である。

そこへ女中が広蓋を運んで来た。皿、小鉢、銚子を並べて、すぐに引きさがつた。

日夏はそれが当然だという距ての取れた手つきで、千鈴の酌を受けた。秘密をあかしてしまえばもはや味方であるという氣持が、千鈴の胸に反射する。それが痛かつた。

「陰謀だなんて、今の百合化粧会社をのっ取ろうというんじゃないの」

「さよう。しかしまかり間違つた場合のことも計画してあるんですよ。すぐに対等の会社の出来るようにと、尾久の工場の主任とも手筈は極めてあるんですからね」

「それじゃ堂々と火蓋を切ればいいのに、じわじわと陰謀をたくらんでるなんていやね。とても封建的だわ」

他人ごとのように顔をしかめてみせるのだが、何か自分の意志が変に歪められた感じで、心の不安はつつみ切れない

かった。義兄や真砂に対する尊敬の気持が、醜い世俗的な方法でへし折られるのに抵抗するのである。その間にも千鈴は無意識に日夏の盃を満たしていたが、相手にこれほどつけ込まれているのには気がつかず、銚子の袴を両手で抑えた。

突然、日夏が黙って部屋を出ていった。

どれだけ経って日夏が戻って来た時、千鈴は思いもよらぬ大きな感動にいまだに手のつけようがなく、ぼんやりとしていた。日夏はにやにや笑って、盃を差し出した。行きがかり上、千鈴は何気なく銚子を取りあげたが、ふと相手のうち寛いだ変った浴衣姿におやと目を見張った。湯上りとみえて、髪が濡れている。すると、不意に具体的に突き当るものがあり、千鈴ははっとした。どうして急にそんな気持ちになったか、自分でも思いがけなかったが、さうな目で見ると、何か一線を越えた、相手の狎れ狎れしい浴衣姿であった。うまくしてやられたと思った。銚子をもとに戻す時、千鈴の顔色は変っていた。

「どうしたの、お酌してくれないの」

差し出している男の手首をびしやりと叩いた。盃が飛んだ。千鈴はべろりと舌を出した。

4

「危いところだった、あんまりお膳立が揃っているんだも

の。すんでのところで欺されるところだったわ」

凄じいものが千鈴の顔色に現れていたが、言葉つきは自分を嗤っていた。

「欺される？ 何、何を言い出すんです。僕にはさっぱり見当がつかない」と当惑の表情を見せるのだったが、腫だけにはこっそりと固くなった注意をこめた。

「もう駄目よ。何と弁解したってもう駄目よ。あなたがいくら弁解したところで、第一こんな場所がいけないわ。あなたに不利だわ。僕には女の君に対して野心がなかったなんて言訳は、こんな場所と言う台詞じゃないわね。それに、その浴衣がけがよくないわ。たとえ義兄さんたちの陰謀が事実であっても、結局はあんな話も一つの道具にすぎないわ。そう考えられても、言い抜けは出来ないわね」

日夏は咄嗟にうまい返答が出来ず、平手で顔を打たれている感じで煙草を啜えた。返事に困っているのを眺めて、千鈴はいっそう自分の言葉のあたっているのを確めた。が相手は煙草の煙の中で笑ってみせた。

「あんまりみっともない喧嘩にならない内に、あたし、おいとまするわね」

計るように何でもない調子で言い、黒い折袴をあけると、ハンドバッグを取り出した。鏡をかざして髪の手台を軽く直した。白い、小さい顔が微笑を殺しているように眺められるのだが、からだ中にかけ回っている強い感情は抑

えているので、指先が顫えて、カールした髪にひっかかるのである。顔色が紙のように白かった。

そしてまだ誰も手を入れたことのない浄水を思わせる、清い、広い額が日夏の目の前で申訳に軽くだがると、もう立ち上っていた。

玄関で腰をおろすと、「もうお帰りですか」と女中がサシダルを揃えて出してくれた。高い踵が危く倒れそうになるので、千鈴ははつきりと部屋から持ってきた怒りを感じた。それまで女中に向っても固い唇を結んでいたが、

「あの男、何という名前だったか知ら」

再び名前を忘れてしまったので、女中に訊ねた。

「さあ、何と仰しやる方でしたか、うちへはあまりおいでになりませんので……」

「誰だったか知ら。さっき名前を聞いたんだけど、すぐ忘れてしまったのよ」

相手の名前を忘れている事実が、何か快かった。ざまあ見る、と言いたい気持である。すると意地悪な感情が浮んで来て、

「お呼びいたしましょうか」

「いいの、いま思い出してみるから」

玄関に腰かけたまま、いろはにほへとちりぬるを——癖で、忘れものを思い出す手段として四十八文字を頭の中で呟いてみた。が、器用に思い出せなかった。思い出すすぐ

そばまで行っているのだが、いま一步というところで頭が都合よく動いてくれないのだ。もどかしいのだが、こんなゆとりをつけた気持は、また何とも譬えようのない愉しさであった。

「呼んで来てよ」

女中は廊下に聲音を立てず、階段を上った。

驢て、男はみっともない顔をもって降りて来た。とたん

に千鈴は名前を思い出した。
「あなたが連れて来たんだから、うちまであたしを送りなさいよ」

日夏は薄く笑って、何とも応えなかった。

「これでもあなたの言う一味徒党のはしくれなんだから」
「千鈴さんには敵わない。もうこれ以上踏みつけないでもいいでしょう。来る時から帰りの時のことまで考えて振舞っているんだから敵わない」

「あら、そんなことないわ。送って貰うこといま思いついたんだから、そんな心でなかったのはたしかよ」
他人事のような口調であった。

5

車は市ヶ谷見付を走っていた。

「あそこの女中さん。とても親切ね。あたしの靴の泥をきれいに落しておいてくれたわ。もう一度お礼が言いたかつ